

「曾祖母が教えてくれた平和」

一宮市立南部中学校 一年 祖父江 陽菜子

私の曾祖母は九十六歳だ。曾祖母は第二次
世界大戦を体験した。

爆弾が落ちてきたとき、水たまりに飛び込
み命を守ったこと。学校が勉強をする場所で
はなくなり、避難の場や作業の場所になっ
てしまっただこと。そして、安全な場所を求めて
疎開したこと。私には想像もできない日々が、
そこにはあった。

私は曾祖母にも、と戦争について話を聞き
たいと思ったが、曾祖母は静かに言った。

「話したくない」。その一言に戦争の体験が心
に深く刻まれることを感じた。その出来事は
心に強く焼き付いていた。

私は戦争を、遠い昔の出来事だと思っ
た。でも、血のつながった家族が体験してい
る。それはもう、私にも関わりのある現実だ
もし自分が曾祖母の立場だったら、ゾッとす
る。爆弾の音、炎の匂い、空腹。想像するだ

けで息が詰まりそうだ。

そして私は疑問を持った。国には憲法や法律で、人を殺してはいけない」と書かれているのに、なぜ戦争になるとその決まりが消えてしまうのか。どうして戦争をやめたい、いやだと声を上げる空気にならなかったのか。とても理不尽だ。

戦争は悲しみしか生まない。曾祖母の話を聞きながら改めてそう思った。

でも、この悲しみがあつたからこそ、今の

平和のありがたさがわかる。私は毎日学校で勉強し、家に帰れば家族がいて、夜も安心して眠ることができる。これがどれほど貴重で幸せなことか。

そして、この気づきを体験した人々が次の世代へ伝えることが、何より大切だと感じた。話しづらくても、つらくても、平和のために語り継いでくれること。それが未来を守る力になるのだと思う。

私は平和な世の中がいいし、それを守って

いきたいと思う。でも、そう願ったからといって、戦争が完全になくなるわけではない。だからこそ、私は自分が関われる範囲で人々を幸せにしたい。

例えば、困っている友達に手を差し伸べること。意見が違つ相手とも、すぐに怒らず話し合うこと。そして、日々の中で気遣いを忘れないこと。無理に人と比べたり、勝ち負けを気にしすぎて、人間関係を悪くするような競争はしないこと。みんな平等に接すること。そうした当たり前の行動を続けていくことが平和への近道だと思う。

また、大人達が選挙や政治の場で平和について訴えているとき、その話をきちんと聞くことも大切だ。私たちが平和についてより深く考え、自分なりの意見を持つこと。それが未来の平和を守る力になるはずだ。